

りに曲りてのぼる奇木怪石千態万狀筆を以ていひがたし已に半途にいたれば鳥の聲をもきかず殆東西を辨じがたく道なきがごとし案内者はよくしりてさきへすみ山篠をおしわけ、幣をさげてみちを示す藤蔓笠にまとひ叢竹身を隠し石高くして徑狭く一步も平坦のみちをふまずやうく午すぐる頃山の半にいたり僅の平地を得て用意したる臥座を木蔭にさきて食をなし暫く憩てまたのぼりくて神樂岡といふ所にいたれりこれより他木さらになく俗に唐松といふもの風にたけをのばさるが梢は雪霜にや枯されけん低き森をなしてこかしこにありまたのぼり少しきだりて御花園といふ所山櫻盛にひらき百合桔梗石竹の花などそのさま人の植やしなひしに似たり名をさらざる異草もあまたあり案内者に問へば藥草なりといへりまたのぼりゆきくてかけはしのぎなる道にあたり岩にとりつき竹の根を力草とし一步に一聲を發しつゝ氣を張り汗をながし千辛万苦しのぼりつくして馬の背といふ所にいたる左右は千丈の谷なりふむ所僅に二三尺一脚をあやまつ時は身を粉碎になすべしおのく忙怕あゆみて竟に絶頂にいたりつきぬ偕同行十二人まづ草に坐して憩ふ時已に下晡なりはじめ案内者のいひしは登り二里の險道なれば一日に往來することあたはず絶頂に小屋在こにのぼる人必その小屋に一宿する事なりといへり今その小屋をみれば木の枝山さ枯草など取りあつめふちかつらにし匍匐入るばかりに作りたるは野非人のをるべきさまなりこを今夜のやどりにさだめたるもはかなしとてみなく笑ふ僕どもは枯枝をひろひ石をあつめて假に灶かまとをなしもたせたる食物を調せんとしあるひは水をたゞねて茶を烹れば上戸は酒の燭をいそぐもをかしさて眺望は越後はさら也淺間の烟をはじめ信濃の連山みな眼下に波濤す千隈川は白き糸をひき佐渡は青き盆石をおく能登の洲崎は蛾眉をなし越前の遠山は青黛をのこせりこに眼拭て扶桑第一の富士を視いだせりそのさま雪の一握りを置が